

北支より南支派遣

アンダマン群島へ

神奈川県 岩澤豊治

私は大正十一（一九二二）年十一月二日、現在の横浜市中区本牧元町の岩澤家の長男として生まれ、姉三人、妹一人の五人兄弟でしたが、四人目の男一人で長男とすること、小学校を卒業すると鉄工関係の会社で働いていました。父は漁師で漁業会社で働いていました。

昭和十七（一九四二）年の徴兵検査で甲種合格となり、昭和十八年二月一日、東部第七部隊に北支派遣楓歩兵第二一〇連隊要員として入隊することとなりました。この東部第七部隊は赤坂の近衛師団でした。ここで戦地の原隊からの受領者の指揮下に入り、約一週間は客分扱いとして、戦地に征くまで、面会やらで家族との別れの機会が与えられました。

二月八日早朝、いよいよ戦地へ出発することとなりました。約千人位の我々初年兵は宮庭に整列、部隊長の訓辞の後に宮城礼拝、隊伍を整えて品川駅まで、まだ薄暗い夜道を行軍し、列車に乗り下関港へと向かいました。

この頃ともなると戦況も刻々と悪化し、大陸戦線は戦勝の様子でしたが、南方戦線は苦戦の状態となり、戦地への輸送等は隠密裡に行われるようになりました。下関から乗船、釜山に上陸、列車に乗り鮮満国境を越え、満支国境の山海関を通過、万里の長城を右に見て南下する。北支の二月は寒い。小便もツララとなる酷寒でした。

やがて列車は彩南と言う駅で停車、下車、チョクウと言う所に駐屯して警備していた中隊本部へ到着しました。直ちに編成され、私は小銃班となり、三八式小銃を渡されました。いよいよ明日から一期の教育が始まると言う事で、その晩はうとうと眠れぬ一夜を明かしました。

兵舎と言っても元中国人の裕福な家だったらしく、中隊全員が入ってもまだ空部屋がある大きな家でしたが、暖房がある訳でなし、寒さは身に染みて、毛布にまるまって寝ていました。食事後の食器洗い、洗濯等は手が切れる冷たさでした。また入隊前の話では軍隊と言う所は内務班教育が厳しく、私的制裁なるものが常例であると聞かされていましたが、ここ第一線での教育では即戦闘要員の教育という事を考慮し、古参兵にも恵まれ、思っていた程の私的制裁もあまりなかったようでした。

しかし即戦闘要員としての軍事訓練は特に厳しい教育でした。三カ月の一期教育を終了すると直ちに討伐作戦に参加しました。

主として八路軍との戦闘で、初めての敵との遭遇でビューン、ビューンと頭上をかすめて行く弾音には亀が首を引っ込めるようになります。驚いて首を引っ込めていると、古参兵から「あの弾音は

頭の上を飛んで行く音だから大丈夫なんだ」と教えられました。「恐ろしいのは竹を割ったような音、即ちパキパキと言う音には気を付ける」と教えられて、敵の至近距離を判断すること等を知る事ができました。

八路軍の出没により幾度か討伐に参加していましたが、幸い負傷者もなく、この年も十二月に入った時、南方派遣の命令が下達されました。私達兵隊には、ただ南方と言うことだけで、行く先の場所は知らされていませんでした。

情報によれば、南方戦線では戦況はだんだん酷しくなり、各島々に駐留していた日本軍は、これらの島々で苦戦をし、玉砕した島もあつたと聞きました。また敵の上陸によって、島の山岳地帯のジャングルへと追いやられたとか、種々悪い情報が続いて聞かされるようになり、快い気持ちではなかつたものです。しかしこれも命令となれば、この身は国に捧げたものだ、自分自身に言い聞

かせて、その日の来るのを待っているといった心境でした。

いよいよ十二月二十日、警備地を出発、上海港に向かいました。民間から借りたと言う五、〇〇トン級の船に乗船、一路南シナ海を南下しました。

台湾の高雄に寄港、約一週間ここに滞在しました。南方方面に行く輸送船団は敵潜水艦の格好の餌食となっていたので、我々はここから海軍の巡洋艦に乗ることになり、再び南太平洋を南下し仏印のサイゴンに寄港しました。まだ仏印はフランスの統治下にあったので油断はできない。

昭和十九年の正月を迎え、約十日間ここに滞在して、情況を見て再び出航、行く先はシンガポールということでした。我々の乗っている巡洋艦は幾度か敵潜水艦に遭遇しましたが、その都度爆雷を投下しつつ難を逃れて航行、やがてシンガポールに寄港、そして最終目的地のアンダマン島に上

陸しました。

この島はかなり大きな島で、海軍及び高射砲大隊、その他の部隊も駐留していましたが、六十余年も経った今日では、これらの部隊はこの部隊であつたのか思い出せません。その後我々中隊は、別の無人島警備を命ぜられ警備に付いていました。

昭和十九年二月には南洋群島の各島々には米軍の海兵師団が上陸、我が軍は玉砕すると言う戦況になり、私共のいるこの無人島にも敵機の空襲が始まり、また艦砲射撃も受けました。しかし幸い砲弾が頭上を越えて落下したので怪我人は出ませんでした。

この島には椰子の木がたくさんあって、生水は飲めないのですが、椰子の実を割って水分補給をしたのですが、その椰子油を包んでいる外皮のコプラという柔らかい肉質部を食べてアメーバ赤痢になつた者がかかり出ました。このアメーバ赤痢にかかると十分ごとに便所に行きたくなり、体力がど

んどんと低下していく。無人島のため病院も無く、中隊でも苦しんで五、六人は死亡してしまったのでした。

その後、敵の攻撃もあまり見られなくなり、部隊は元のアンダマン島に戻り、昭和二十年の正月を迎えました。

この頃ともなると南方戦線の戦況は日に日に悪化し、食糧を運ぶ船等は次々に撃沈され、補給は無く、現地での自給の生活になったのです。部隊では元農家出身で入営前に農業をやっていた者が主となって、サツマ芋の栽培を始めたのです。勿論道具は円匙と十字杷のみで、畑を造りました。

この島には島民もいたので、彼らから芋蔓の先をもらって畑に差し込んで見ると、暖かい南方では三、四カ月位で芋になりました。これを主食として、敵機の来ないのを見計らって海岸へ行き、手榴弾を海中へ投げ入れて、浮いた魚を蛋白源としました。しかしこれも限界となり、雑草やヘビ、

トカゲ等も食べていました。

島民の作つてあるバナナ、椰子の実、パンの実等を盗んで食べましたが、これは禁じられていたようです。しかし、幸いにも我が中隊には栄養失調者もあまり出ませんでした。

昭和二十年八月十五日、終戦を迎え、イギリス軍に武装解除され、日本に還るまで、主にイギリス軍の上陸用舟艇からの荷揚げ作業などの使役に従事しました。また畑を造った跡の整地作業をやりましたが、イギリス軍は過酷な労働等は強いませんでした。

昭和二十一年五月、復員船で名古屋港に上陸、復員手続きを完了させ、懐かしい我が家へと向かったのですが、街と言う街はほとんどが焼け野原と化し、見る影もない姿でした。帰る列車の中、我が家もこのような状態かと思つて横浜に着いて見たら案の定、どこを見ても爆撃の跡の惨憺たる光景でした。

そして我が家に辿り着いたところ、不思議にも出征当時のままの姿なものには驚きました。と言うのは、我が家の近所には外人の住宅地があったので、アメリカのP51も外人街には爆弾を投下しなかったと言うことが分かり、人生の明暗もこういうところにもあるのかと思いました。

家族も空襲では誰一人被害を受けず無事でしたのが何よりの幸いでした。しばらく休養をとり、体力の回復と共に東京湾に出て漁師の仕事をしておりました。

今六十年の過去を振り返って見るに、私の軍隊生活は他の人に比べあまり苦勞の生活は少なかったと思います。同じ南方戦線でも死線を越えた戦闘体験はありませんでした。

幾多の戦闘で苦戦をされた皆様、そして不運にも英霊となられた方々に対し、ここに謹んで哀悼の微衷を捧げるのみです。

ハルピン第一七七部隊

神奈川県 西山吉重

私は大正九（一九二〇）年三月三日生まれ、昭和十六（一九四一）年十二月七日、山梨県甲府の歩兵第四十九連隊に入営した。当時、家業は指物師で、父母は共に健在で四人の姉弟であった。小学校を卒業すると東京に出て、クリーニング業の見習の修業をしていた。

歩兵第四百四十九連隊で一期の検閲を終え、満州ハルピンの第一七七部隊に転属、ガス兵の教育を受ける。部隊はハルピン郊外の孫家（ソンジャ）にあった。

ガス教育は主にイペリット、ルイサイトの取り扱いで、訓練中に皮膚が爛れたこともあった。いわゆる皮爛性のガスであったからである。このガスは、戦闘で直接使用うことはなく、教育のために試験的に使用したのであるが、毒ガス教育の一環